

私500〜LIGHT〜

モガリ

まなみ
真奈美 (洋舞)

南インド古典舞踊はバラタナーティヤムといい南インド・タミルナードウ州発祥でインド四大古典舞踊のうち最古の伝統がある。寺院から発生した祈り・神話の踊りであり、紀元前一世紀頃には、音楽と舞踊の経典「ナタヤ・シャーストラ」が書かれている。踊り手は寺院に直属していた「デーヴァダーシー」(神様の召使い)と呼ばれていた。現在の形は一九世紀初め頃、舞台芸術として整えられた。

この踊りに出会ったのは二十五年前。それまでの生活を変えて何か新しいことを始めようと思っていた時に、偶然会った初対面の人から「南インド古典舞踊をやりませんか？」と声をかけられた。初めて「南インド古典舞踊」という単語が私の耳に入った瞬間！「何それ？」と戸惑ったが熱心に薦めてくださるので、何となく楽しそうかな。と軽い気持ちでその扉を開いてみた。その人とはそれっきり会うことがなかった。今でも不思議に思う。

まずは薦められた京都の教室に通い出し、四肢目肩指をさまざまに動かすステップの練習を始めるものの簡単ではない。踊りを見たことがなかったし、インターネットの情報もない時代だ。よくわからない状況で思うように動かない身体と向き合うことになったのだが、リズムはとても心地よかった。全く一からのスタートは新鮮で面白く南インド古典舞踊のリズムを吸収しようとする身体を愛おしく感じた。

さらに南インド古典舞踊を知るべく新たな出会いを求め一年も経たないうちに南インド・マドラ

ス(現チェンナイ)に向かった。当時は欧米資本が入ろうとするころで、南インドはまだまだ遅れていた。冷たいジュースはなく、道路はほとんど土のまま、スーパーマーケットがないので買い物に不便でモノも少ない。多少の予想はしていたがバブル期を謳歌したこの身にはカルチャーショックの一言に尽きた。しかし、しばらく身を置き日常に目をやると今まで見たことのないような「美しい」を感じてきた。サリーに身を包む女性たちの、足裏を大地にしつかりと付けて体幹を引き上げしなやかに歩を進める姿に見とれたものだ。ギョロツと開いた目の奥に清々しさを感ずるのはなぜだろう。食べる時の指さばきなど指先への気の流れが自然でありながらインパクトを持つ。たちまち「あこがれ」へと一変し、それらの美は南インド古典舞踊の土壌だと知った。思うように身体が動かなかったはずである。

一方、知り合ったインド人からインド神話と神々について教わる機会を得て、宇宙自然観、叡智、普遍の愛など生きる術を網羅しているが摩訶不思議で茶目っ気のある内容にのめり込んだ。「このインド神話を表現する南インド古典舞踊に出会えたなんて！」早速、舞踊学校を紹介してもらいプライベートレッスンに通った。ワクワクしながら



神戸ビエンナーレ2015まちなかコンサート
(於: 生田神社会館)



モガリ真奈美 (もがり まなみ)

南インド古典舞踊グループ・マルガユニティー主宰
関西日印文化協会理事
南インド古典舞踊家

1990年 南インド古典舞踊を始める。南インド・チェンナイにて K.P. ヤショーダに師事。
1997年 関西日印文化協会に入会。
1998年 南インド古典舞踊グループマルガユニティーを開設。
2001年 師匠 K.P. ヤショーダの招聘公演(大阪・神戸)開催。
2001年~兵庫県立西宮香風高等学校「異文化体験・インド古典舞踊(選択科目)」特別非常勤講師を勤める。また、古代インドの神々と日本の神々の共通点や、南インド古典舞踊の演目にある太古からの今に伝わるメッセージ、感謝、祈り、神話を伝える LIVE・公演活動を始める。関西日印文化協会主催の日印文化交流イベント「INDIA 太古のひびき」「I LOVE INDIA」の企画、演出、出演を担当する。
2010年~西日本最大のインドの祭り「インディア・メーラー」(在大阪・神戸インド総領事館主催)に毎年出演。
現在は、大阪・宝塚・三宮にレッスン教室を開設。

講師の手ほどきを受け身体が動き出す喜びを感じていた。これがご縁で講師であったK.P. ヤショーダに今も師事している。そして寺院で観た光り輝く彼女の踊りは、私を鼓舞し目標が定まった。「シンプルでありLIGHT。それは手放すこと。」沢山の有り難い出逢いがあり、また重い荷物を下ろすことも教えてくれた南インド。その後の活動は、劇的に人生を変えた南インド古典舞踊の出会いと南インドでの始まりの衝撃、感動、感心を体現し伝えたいとの想いで続けてきた。そして、たくさん有り難い出会いをいただき、皆様のお導きのおかげで、今もこのように続けさせていただいている。皆様への感謝・南インドへの感謝の心と共に、今後も心身の鍛錬を続けつつ、南インド古典舞踊にある太古から今に伝わるメッセージを表現していきたい。さらには後進や青少年の育成など、南インド古典舞踊を通して社会貢献することを目標としている。